



TITLE:

Jean Racine小論 : Antoine Le
Maîtreとの関連に於て

AUTHOR(S):

吉田, 洋一

CITATION:

吉田, 洋一. Jean Racine小論 : Antoine Le Maîtreとの関連に於て. 仏文研究 1978, 5: 87-135

ISSUE DATE:

1978-06-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/137616>

RIGHT:

は じ め に

Jean Racine (以下 Racine) が Port-Royal¹⁾ と浅からぬ関係を持つ家系に生を享け、その少年時代を Port-Royal で過ごし、所謂《隠士達》(solitaires) の手によって教育されたこと、死後その遺志に従って彼の師父の一人であった Hamon の墓の傍に葬られたこと等々は周知の事実である。Racine の生涯は、いわば Port-Royal によって始まり Port-Royal によって終ったといえよう。成程 Racine と Port-Royal の関係は、疎になり密になり紆余曲折を経る。とりわけ彼の創作活動の時期は Port-Royal からの決定的な離反の様相を呈してはいる。がしかし彼の悲劇詩人としての生涯が Port-Royal との結びつきを抜きにしては存在しなかったであろうことは誰しも否定できないところである。

このことから、直ちに Racine と所謂 Jansénisme との関係を説くことは差し控えたい。何故ならば、Jansénisme とはそもそも何かという問題が一義的な解決をみていないからである。そもそも Jansénisme なる主義は存在しなかったとする考えが今日では通説となつてさえているし、また後に触れる如く、Port-Royal に隠棲した人々の旧教刷新運動がすべて Jansénius の思想に結びついていたわけでもない。とはいえ、Port-Royal を中心として旧教の改革を目指す運動が展開され、当時の一流の、しかも少なからぬ知識人達がそこに集っていたこと、またその集団に対して時の権力が迫害の矢を放っていたこと、ともに明白な事実である。従つてそれらの人々の中に、時の権力が黙って見逃すことのできない何らかの共通の思想と行動が存在したと考えることは許されるであろう。Racine と Port-Royal との関係をたどることによって、この Port-Royal を拠点とする運動に内在する共通の行動様式、思想的基盤を探り当てることができれば、それは単に Port-Royal 運動のみならず、Racine の生涯と作品の一側面にも光を当てることとなろう。Racine と Port-Royal の関係という論じ尽されたかに見える角度からの接近によって Racine の生涯と作品の一側面を明らかにし、ひいては Port-Royal 運動の問題への展望を

ひらこうというのが小論の目的である。

さてそれでは以下にその作業の手順と方法の概略を述べておこう。

Racine の生涯を Port-Royal との関係に於て見ると、ごく大ざっぱに言って三つの段階に分けることができるだろう。その分岐点となるのは Racine が Port-Royal との絆を断ち切りたくなるようになった時点と、その絆が断ち切れぬ強さをもっていたことを自覚した時点である。従って第一段階は Port-Royal とともにあった時期、即ち彼の出生より、後に悲劇詩人として立つことを可能にする教養を獲得するまでの時期である。第二段階は Racine の内部に詩人として立つ希望が抑え難くなり、Port-Royal との離反を深め、悲劇詩人として、宮廷人としての地位を獲得する時期である。後世に彼の名を残すことになる活動、*Andromaque* から *Phèdre* に至る作品がこの時期に生み出されていることは言うまでもない。第三段階は栄達を遂げた彼の心が再び Port-Royal に向い、密かに『Port-Royal 史抄』を書き、死を迎えるまでの晩年である。因に *Phèdre* の発表は 1677 年であり、その序文に於て Racine はかつて論争した Port-Royal の師父達との和解を示唆しているともとれる発言をしている。また同年国王の修史官に任命された彼は以後長い沈黙に入るのである。もとよりこれらすべての事態は Racine の内面に於て徐々に萌したはずであり截然と分つことはできないが、便宜上敢えて上述の如く区切ってみたのである。

本稿では第一部に於て、上記の第一の時期を取り扱うが、Port-Royal とその忠実な弟子としての Racine の関係を示す個々の事実を編年体でたどってゆくこととする。そこで中心となるのは少年 Racine の教育にことのほか情熱を注いだとされる Antoine Le Maître (以下 Le Maître) との交渉であるが、両者の密接な結びつきが常に指摘される割には、その具体相を我々に語る直接的資料は乏しい。そこで我々は少年 Racine の前にあった Le Maître が如何なる人間であったのかを明らかにするため彼の人と思想を有名な“隠退宣言”等を検討することによって再構成してみることにする。更に時代的背景も考察することによってこの“隠退宣言”そして Le Maître の史的位置付けも試みたい。

第二部に於ては、前述の第二の時期、つまり Racine が Port-Royal を離反していた時期を問題とする。それは勿論 Racine の悲劇詩人としての活動期を意味する。ところで *Andromaque* を世に問うた 1667 年より *Phèdre* 発表の 1677 年に至る期間、彼の手になる書簡は皆無と言って差し支えなく、我々に残されたものは作品

のみであり、当然のことながら取り上げるのは悲劇ということになる。本稿ではその中から *Andromaque*, *Britannicus*, *Bérénice*, *Phèdre* を取り上げ、制作年代順にそれらの内的構造を検討する。ここで何故所謂三大悲劇に *Bérénice* をも加えて考察するのかという点についてその理由を明らかにしておく、この作品が所謂三単一の法則の枠に最も忠実な実験的作品として、単純すぎる程単純な構想になる悲劇として、Racine 劇の中でひとつの頂点をなしていると考えられるからである。これら四つの悲劇の中には Racine 劇のはらむ主要な問題はすべて含まれていると言えるし、後世の評価からしてもこれら四悲劇を抽出して検討することを恣意的であるとして全面的に斥けることはできないであろう。

我々は四悲劇に共通する枠組に着目し、その構造を比較検討することによって Racine 悲劇を構成する人間の思考形態、行動様式の核とでも呼ぶべきものを明らかにする。

そして結論部に於て、我々はそれと *Le Maître* という人間の体現した思想、行動様式との間にアナロジーが見出せることを指摘し、そこから Racine 悲劇の重要な核が *Le Maître* と関連していると結論する。

註

- 1) ここで言う Port-Royal とは、単に Port-Royal 修道院等を指すのみならず、そこを拠り所として展開された広範な宗教刷新運動、その精神的共同体の全体をも指すものとする。

Racine の出生は 1639 年末、La Ferté-Milon に於てである。この時と場所が既に Racine と Port-Royal の並々ならぬ関係を物語っている。以下に当時の Port-Royal にかかわる主要な出来事を年代順に列挙してみると次のとおりである。

1635 年 Saint-Cyran, Port-Royal の霊的指導者となる。

1637 年 Antoine Le Maître の隠退宣言。

1638 年 5 月 Saint-Cyran の逮捕、並びに Vincennes 投獄。

7 月 Laubardemont の退去命令により、Antoine Le Maître, Le Maître de Séricourt, Claude Lancelot は Port-Royal des Champs を去り、La Ferté-Milon の Vitart 家に避難し翌年夏まで滞在する。

以上の事からも明らかなように、Port-Royal が迫害の渦中にあった時、Racine はこの世に生を享けたのである。しかも三人の solitaires が迫害を逃れて身を隠していた Vitart 家は Racine の縁者であった。即ち、Racine の父方の祖母 Marie des Moulins の妹 Claude des Moulins の嫁したのが Vitart 家であった。彼女らと姉妹になる Suzanne des Moulins が 1625 年以来 Port-Royal にあったこと、また Claude の息子 Nicolas Vitart が Port-Royal で教育を受けていたこと、そのような縁故によって三人の solitaires は Vitart 家に身を寄せていたのである。Lancelot の回想録によれば、Nicolas の教育を中断するわけにはいかなかったからである。それは「やりかけた善き仕事を途中で放擲してはならぬ」という Saint-Cyran の言葉に従ったものである。¹⁾

La Ferté-Milon に於ける彼らの生活は人目を忍び自室に閉じ籠る毎日であった様子だが、彼らは暗黙のうちに小さな集落全体に深い影響を及ぼしており、住人達も彼らに深い敬意を抱いていた模様である。²⁾この時の三人の滞在の感化の大きさは後に Racine の縁者達が相次いで Port-Royal に隠棲したことからも十分納得できよう。

かくして La Ferté-Milon では、Port-Royal との絆を一層緊密にして Racine の出生を迎えることとなる。しかしながら Picard も言う通り「後年 Racine が経ることになる驚くべき栄達を予見させるものは何もなかった」³⁾。Paris から 76 キロ

隔った片田舎、しかも貧しい家系であった。Racineの母親 Jeanne Sconin は1641年1月、妹 Marieの出産直後に世を去る。父は再婚するが1643年2月に彼もまた世を去る。3才にして両親を失うことになる Racine を母の死以来引き取り養育したのは祖母 Marie des Moulins とされるが、実質的に母親代りとなったのは娘 Agnès (Racine の叔母) であろうと考えられる。Agnès が Port-Royal に1642年に入る際に示した躊躇の原因が彼女の育ててきた幼い Racine であったとする Orcibal や Picard の説⁴⁾は或る程度納得の行くものである。更には1649年には祖父までが死ぬのであるが、「この悲惨極まる状況が、逆説的とも言える仕方では若き Racine の運命に幸福な影響を及ぼすことになる」⁵⁾。即ち、孤児となって祖母に引き取られたこと、祖父の死により経済的に困難な状況に置かれたことが Racine の La Ferté-Milon からの脱出を可能にしたのである。祖父の死を契機にして祖母は Racine を伴って、娘の Agnès や、先に述べた Suzanne des Moulins のいる Port-Royal に隠棲することにしたからである。当時の社会にあっては生れ落ちた環境に固定され、そこから逃れ出すことは至難であったろうから、Orcibal も言う如く、「もし彼の家族を Chevreuse の谷の修道院に結び付ける絆が無かったなら、Jean Racine は恐らく片田舎で惨めな一生を送ったことだろう」⁶⁾。

このようにして祖母とともに Port-Royal に入った Racine は1649年から1653年まで所謂 Petites Ecoles de Port-Royal に於て教育を受けることになる。Vitar 家が三人の solitaires を匿った恩義に対し、Port-Royal は Suzanne des Moulins の縁者である Racine を教育することによって報いようとしたのであろう。他の生徒達とは違い Racine の学費は一切無料であったとされている⁷⁾。しかも彼の指導にあたった師の中に Nicole, Lancelot そして Le Maître が含まれていたことを考えると、他の何処に於ても得ることのできない正に特権的な教育を Racine は享受していたと言わねばならない。

1653年10月には Racine は Beauvais の collège へ遣られる。とはいえそれは決して Port-Royal からの離脱を意味しない。何故なら、Orcibal によればその教授陣程「Port-Royal 修道院と精神的に深く結び付いた教授陣はフランス中何処にも存在しなかった」⁸⁾ からである。

1655年10月に、Racine は論理学を残したまま Port-Royal に戻る。その理由は分明ではないが、この帰還の折に彼は Le Maître の個人教授を受け、ギリシア語の読書力に一層の研ぎをかけたとされる。

1656年3月には Port-Royal に隠棲していた solitaires のみならず、生徒達に

まで退去命令が下される。しかしこの命令に先立って Le Maître は Port-Royal を離れていた模様であり、退去命令に先立つ日付の Racine 宛の有名な手紙が残されている。Racine もまた一旦は Port-Royal を去り Nicolas Vitart を頼って、彼が執事を務めていた de Luynes 公爵の館に身を寄せたらしい。そして Racine は当時 11 才であった de Luynes 侯爵の家庭教師を務めていた Lancelot の指導を受けたとされる。⁹⁾しかし Racine はすぐに Port-Royal に戻りそこに留まっていたらしく Hamon の指導を受けたともされている。1657 年には Le Maître は Port-Royal に戻ったと考えられ、Racine との間には従前どおりの師弟関係が復活したと見るべきであろう。

1658 年 10 月、Racine は Beauvais の collège で中断した学業を完成すべく Collège d'Harcourt に赴く。さてこの collège もまた密接に Port-Royal に結び付いていたのであり、Orcibal によればそれは「長らく Jésuites への敵意の故に際立っており、また学長の Thomas Fortin は Port-Royal の最良の友の一人に数えられていた」¹⁰⁾。更にまた、Pascal の *Les Provinciales* のいくつかはこの collège で密かに印刷されていた事実があるし、Picard によればこの企てに Nicolas Vitart が参画していたと推定し得る史料が残されているのである。¹¹⁾

Racine を Collège d'Harcourt へと送り出した Le Maître は 1658 年 11 月、世を去る。

以後 Racine の内部では詩人として立とうとの念が次第に抑え難くなるわけで、*La Nymphe de la Seine* に続き悲劇をも試作するに至る。もとよりこのような文学活動は、法律家としての将来を彼に期待していた Port-Royal の師父達の希望とは相容れず、次第に Port-Royal との疎隔は深まってゆく。俗世からの離脱を意図し、それを身をもって行ってきた Port-Royal の師父達の生き方とは正反対の方向を目指して、即ち俗世での栄達を求めて Racine は野心のみを指針にしているかの如き生き方を以後続けることになる。

しかしながら上に見た如く Racine の出生より 20 年間に、彼を取り巻いてきた環境が常に Port-Royal と密接に結びつき、その影響下にあったことは明白である。時の権力からの迫害の中であって、Port-Royal に拠った人々は離散し、居所の定まらぬ生活を余儀無くされていた。従って Racine と Le Maître をはじめとする師父達との交渉も必ずしも平坦なものではなく度重なる中断を含んでいたであろう。だが彼の傍には常に同じ精神の絆に結ばれた師父達の誰かがあって、彼の指導にあたっていたのであり、しかもそれらの師父達が当時の第一級の知識人であったことを

思えば、若年の Racine の鋭い感性が、そこから何も感じ取らなかったとは到底考えることはできないであろう。とりわけ Le Maître は Racine に愛情を注ぎ、彼に自室で起居を共にさせていたとも、また両者はお互いを《mon fils》、《mon père》と呼び合っていたとも伝えられている。¹² Le Maître 程の卓越した人物と日夜生活を共にして薫陶を受けた Racine が、そこから後の栄達に必要な知識のみしか汲み取らなかったと見るのはあまりに皮肉にすぎよう。Le Maître の死以後の Racine の行動の表面に現れた師父達への威丈高な反抗、殊更に師とは対蹠的な生き方を選んだこと自体が、彼の心が Port-Royal からすっかり離れていたということよりむしろ彼の内部に Port-Royal への深いこだわりが存在したことを示していると思えるべきではなかろうか。

ともかく上述の諸事実に照らしても若き Racine が置かれた環境から、また彼の指導にあたった師父達から何の影響も受けなかったと考えることは極めて困難である。それでは Racine がそこから影響を受けるとすればそれは如何なるものであったろうか。それを直接的に知る手段を持たない我々は、逆に、Racine の前にあった師父達の姿、とりわけ彼と密接な師弟関係にあったとされる Le Maître が如何なる人物であったかを知ることによって、Racine の眼に映じていたはずの事象、ひいては彼が受け取り得たはずの影響を推し量ることができるだろう。次章では Le Maître の思想と行動を、彼の書簡を検討することによって探ってみることとする。

註

- 1) Claude Lancelot : Mémoires touchant la vie de Monsieur de Saint-Cyran, (Slatkine Reprints), t. I, p. 119.
- 2) Ibid., p. 122 ~ 125. 参照.
- 3) Raymond Picard : La carrière de Jean Racine, (Gallimard), p. 21.
- 4) Jean Orcibal : L'enfance de Racine (Revue d'Histoire Littéraire de la France, janvier-mars 1951, p. 4.)
Raymond Picard : op. cit. p. 24. p. 562.
- 5) Raymond Picard : op. cit. p. 23.
- 6) Jean Orcibal : op. cit. p. 3.
- 7) Raymond Picard : op. cit. p. 25.

- 8) Jean Orcibal : op. cit. p. 7.
- 9) Raymond Picard : op. cit. p. 26.
Jean Orcibal : op. cit. p. 8.
- 10) Jean Orcibal : op. cit. p. 11.
- 11) Raymond Picard : op. cit. pp. 27 ~ 28.
- 12) Jean Orcibal : op. cit. p. 15.

先にも触れたとおり、1637年 Antoine Le Maître は突如隠退の決意を表明する。若くして既に Conseiller d'Etat の肩書を有し、雄弁な弁護士として著名であった彼が庇護を受けていた大法官 Séguier 宛に書簡を送り、自分の現在の地位をすべて放擲して隠棲し、沈黙と悔悛のうちに余生を過したい旨を明らかにする。¹⁾

« Je quitte,... non-seulement ma profession,... mais aussi tout ce que je pouvois espérer ou désirer dans le monde; et je me retire dans une solitude pour faire pénitence et pour servir Dieu le reste de mes jours, après avoir employé dix ans à servir les hommes. »

その能力の故に、また Arnauld 家につながる家系からもより輝かしい将来が期待され、事実約束されていた彼のこの行為が、当時の人々を驚かさなければならなかった。しかも彼の行動に同調する者が少なからず出たことから騒ぎが一層大きくなったのは当然といえる。

しかしながら、我々がここで注目しなければならぬのは、Le Maître の隠退が、政官界から聖界への単なる鞍替えを意味するのではないという点である。即ち、抛った地位と声望の代償として聖職を得ようとするのではなく、今後聖俗を問わず如何なる地位につく意思も無いということを明言しているという点である。予想される世間の誤解や臆測に対し、彼は繰り返しそのことを明らかにしている。²⁾

« ... je renonce aussi absolument aux charges ecclésiastiques qu'aux civiles; ... je ne veux pas seulement changer d'ambition, mais n'en avoir plus du tout; ... je suis encore plus éloigné de prendre les Ordres de Prêtrise et de recevoir des Bénéfices que de reprendre la condition que j'ai quittée ... »

それでは隠退によって可能となる悔悛の生活とは具体的には如何なるものであろうか。Le Maître の意図するところは次の一節から窺い知ることができるだろう。³⁾

« ... je ne demande à Dieu autre grâce que celle de vivre et de mourir en son service, de n'avoir plus de commerce, ni de bouche ni par écrit, avec le monde qui m'a pensé perdre, et de passer ma vie dans la solitude, comme si j'étois dans un monastère. »

一見ここでは隠退生活の三つの相が並記されているかの如く思われる。しかしながら注意深く見れば後の二つの項目は先の事項を満たすための条件であることがわかる。即ち、「神への奉仕に生涯を捧げる」ためには「俗世とあらゆる交渉を断つ」ことが必要であるし、そのためには「あたかも修道院に居るかの如く孤独の中で生活すること」が可能でなければならない。つまり「神への奉仕」の生活という唯一至高の目的を実現するためには、俗世とのあらゆる絆を断ち切って孤独の中にとじこもらなければならないのであるが、その「孤独」とは「あたかも修道院に居るかの如き」生活ではあっても、修道士となることを意味しないという点に我々は注意する必要があるだろう。Le Maître は神の前に自身を委ねるに際し、必ずしも聖職者である必要はないと考えているわけである。更にいえば「神への奉仕」は一介の信者としてなすべきであり、Le Maître と神の間に如何なる資格も制度も介在する必要がないということであろう。神の前で問われるのは Le Maître の内面であり、彼の悔悛の質であろう。そこで彼の世俗での栄誉が問題となるはずはないし、聖職者としての地位の高低が問われるわけではないだろう。彼がこのような信念を抱いていたことは彼が父に書き送った手紙の一節に徴しても明らかである。⁴⁾

« ... je ne quitte point le Palais pour me mettre dans l'Eglise, ... Je n'entre point aussi dans un monastère, Dieu ne m'en ayant point inspiré la volonté; ... je me retire dans une maison particulière, pour vivre sans ambition, et tâcher de fléchir par la pénitence le Dieu et le Juge devant qui tous les hommes doivent comparoître. »

更に Le Maître は隠退の決意を固めた時の彼の内面の事情を次の如く書き記している。⁵⁾

« ... sans que nul homme de la terre m'en ait parlé, sans qu'aucun de mes amis s'en soit pu douter avant que je lui ait dit, je me sentis persuadé par moi-même, ou, pour mieux dire, par le sentiment que Dieu, qui parle aux cœurs et non pas aux oreilles des hommes, a mis en moi. »

つまり、この隠退の決意を固め実行に移すに至る経緯の中に、如何なる意味に於ても他者の介在は無かったと Le Maître は言っているわけである。誰から示唆を受けたのでもなければ、又、誰も彼の内面に生起する事態を洞察したわけでもなく、彼の内部に於ける神との直接の交渉の所産がこの行為であったのである。しかし神

の直接の働きかけとはいえ、それは彼への特別な啓示や、見神体験を意味するのではなく、彼が福音書の中の悔悛への呼びかけに従ったまでにすぎない。そして既にここにも見て取れる彼の志向、即ち自身を外界から遮断し、ひたすら沈黙と悔悛の中に閉じ込めようとする傾向は終始彼を支配し、その死に至るまでに変わることはないのである。

ところでこのように世俗の虚飾、あらゆる外的価値を自身から削ぎ落とし、言わば裸形を神の前に委ねようという Le Maître の決意の中に、最後の裁きの場に於ける救いを慮っての怯懦を読み取ろうという立場も存在するであろう。しかしながら Le Maître の決意はそのような消極的な動機から生まれたと見るべきではなく、むしろそこに積極的な主張が蔵されていることに着目すべきであろう。例えば彼は父宛の同じ書簡の中で次の如く述べているのである。⁶⁾

« ... ce n'est pas faiblesse d'esprit d'embrasser la vertu chrétienne, puisqu'une personne qui n'a point passé jusqu'ici pour foible ni pour scrupuleux, et qui est encore le même qu'il étoit lorsqu'il eut l'honneur de vous voir la dernière fois, se résout de changer ces belles qualités d'Orateur et de Conseiller d'Etat en celle de simple serviteur de Jésus-Christ. »

当時の社会を支配していた価値体系の枠組の中で、その価値の階梯をほぼ頂点まで昇り詰めたかに見える Le Maître が一転して単なる神の僕の位置に身を置こうというのである。これは単に既成の価値体系の否定を意味するのみならず、彼が身をもって行ったことにより、一種の価値転倒の実践、更には新たな価値体系の主張としての意味をもつことになる。一方の極から他方の極へとでも言うべき Le Maître のこのような行為は世間一般の目には狂気の沙汰と映じたかも知れない。しかしながら、これは彼が自己の内面の命ずるところに忠実に従ったまでであり、神の目にはそのようには映らないであろうと彼が考えていたことは Séguier 宛の書簡の一節からも明らかである。⁷⁾

« ... j'espère que ce qui paroîtra une folie devant les hommes, ne le sera pas devant Dieu ... »

さて以上の如く Le Maître の書簡を通じて彼の思想と行動の一端を見てきたの

であるが、そこに明瞭に現れているのは“脱社会性”あるいは“非社会性”とでも呼ぶべき性格である。即ち、信仰のために、単に政治的生を放棄するのみならず、彼は通常の意味での社会的生をも否定しているのである。彼が如何に徹底して外界との交渉を遮断し、自己を孤独と沈黙の中に閉じ込めていたかは Rapin 神父の次の言葉によっても知ることができよう⁸⁾。

« ... On dit qu'il se tua d'étude, de travail et de solitude, car il ne s'occupait que de cela; on le trouvait quelquefois dans le fond de la forêt au pied d'un arbre, à rêver des jours entiers, sans voir personne, et son attachement à la méditation et à la solitude était si profond qu'il ne prenait pas même garde à ceux qui passaient et qui le trouvaient en cet état. »

このように他者との交渉を極力自己の生活から排除しようという姿勢を Le Maître が以後崩さなかったことを知れば、修道士となることも聖職者としての叙品も拒否したのは世俗社会の秩序のみならず、教会内、修道院内での世俗社会に類似した秩序からも離脱しようとしていたがためであることは容易に納得できよう。

ところで、上記の如き行動が Le Maître のみにとどまったならば、一個人の社会からの脱落として片付けられたかもしれない。また、Séguier 宛の書簡に於て世の常とは異なる価値観が展開されていることは認められても、それが意図的になされた主張であると断ずることはできないかもしれない。

しかし、私信ではあるが Séguier 宛書簡は事実上公開状として多数の人々に回覧されたのであり、Le Maître の行動には少なからぬ同調者が出たのである。国家枢要の地位への集団的な否認は、世の支配的価値体系の公然たる否定を意味することになる。少くとも、Le Maître の隠退宣言に見てとれる価値体系と相反する価値体系に依拠しそれを維持すべき立場にあった人々の側からは、挑戦状と看做されてもやむをえなかったであろう。先に指摘した“非社会性”あるいは“脱社会性”の中に潜む“反社会性”が嗅ぎつけられたわけであり、このような集団的行為に対し、世論は当然のことながら沸騰する。Le Maître 及び彼に連なった隠士達の霊的指導者と目されていた Saint-Cyran は、社会からのこのような集団的離脱運動のいわば元兇として告発され Vincennes に投獄される。以後彼は Richelieu の死までそこに幽閉されるのであるが、この理不尽な逮捕の理由として L. Goldmann は Richelieu が Saint-Cyran の新しいイデオロギーの及ぼす影響を恐れたからでは

ないかという推断を下している⁹⁾。成程 Saint-Cyran の説いた《再生 (renouveau) 説》に於ては「俗世からの離脱」や「過去の生活との断絶」が厳しく要求されていた¹⁰⁾し、「与えられた恩寵を保ち、結実させるために可能な限り隠れた生活をする事」が命じられていた¹¹⁾。そしてこれはまさしく Le Maître らの行動と照応しており Saint-Cyran の影響力の大きさを認めることができよう。しかし更に重要なことは、上記の如き考え方を受け容れ、それを支持し実行に移す広範な層が存在したという事実である。即ち、当時の社会の支配的価値体系を否定し、その階層秩序からの離脱を企てる勢力が存在し、しかもそれが時の権力にとって無視できぬ程のものであったということである。

ともかくも、Le Maître の隠退宣言を契機として、俗世否定の思想が明確な形をとって動き始めたわけであり、Saint-Cyran 逮捕という Richelieu の対応は第一次の Port-Royal 迫害へと発展してゆくのである。

さてそれでは 17 世紀という時代の中で、この Port-Royal を拠点とした所謂“隠士達”の集団は如何なる位置を占めるのであろうか。俗世を捨て、孤独と沈黙の中で悔悛の生活を送ろうという彼らの特異な行動様式を考える時、それとは際立った対照性をもって想起されるのは所謂 jésuites の生活振りである。彼らの行動の著しい特徴は、その過剰なまでに積極的な社会参与、時の政治への介入である。即ち、彼らは宮廷へは聴罪司祭として入り込み、海外へは宣教師、更には商人として進出していたことは周知の通りである。このような jésuites の活動が本来宗教改革への対抗策、カトリック内部での自己刷新運動として生れたものであることは今更言うまでもないが、Port-Royal を拠点とする所謂 jansénistes の活動もまた反宗教改革運動 (contre-réforme) の一環としてのカトリック内部での動きであったことを確認しておかねばならない。jésuites と所謂 jansénistes の対立という観点からは、恩寵と自由意志をめぐる神学論争が想起される。事実この問題に関して両者は対立してはいたが、それはあくまで事態の一側面を示すにすぎない。先にも触れた如く Port-Royal に拠った人々がすべて Jansénius の所説の信奉者であったわけではないし、また Jansénius の思想には実践運動的側面は欠落しており、彼らを一括して jansénistes、彼らの思想と活動を jansénisme と呼ぶことは適当ではないだろう。彼らの jésuites との対立のより根本的な原因は両者の実践的側面にかかわっていたと言えよう。即ち、カトリック教会を内部から改革しようという共通の出発点に立ちながら、jésuites は新時代の要請に即応し、努めて時代の社会へとけ込もうとしていたのに対し、所謂 jansénistes はそれとは全く逆に、社会そのも

のから極力遠ざかることによって原始キリスト教の純粋な信仰生活に立ち返ろうとしたのであった。このような現世否定の傾向が、折から人間の本性への激烈な断罪を骨子とする思想を表明していた Jansénius の教えと結びついたとしても何ら不思議ではないし、事毎に彼らから批判、非難の対象とされていた jésuites が、逆に Port-Royal に集っていた人々を一括して jansénistes と呼んで攻撃していたという側面も存在するであろう。そして jésuites が時の権力に協力的であった事を思えば、それと正反対の道を選び、非協力を善しとした Port-Royal 派の人々が反社会的集団と看做されてもある意味では当然でありやむを得なかったと言えよう。

上記の如き歴史的脈絡に於て Le Maître を眺めてみるならば、彼の隠退宣言は反宗教改革運動 (contre-réforme) の中での相反する二つの潮流の一方に明確な表現を与えて世間の耳目を引き付けた上で、自ら実行することによってそれに形を与えたと言えよう。彼の信ずる価値体系への最初の自覚的な殉教者として、Port-Royal 運動の象徴的人物と見るのが我々の Le Maître の史的位置付けである。

さてこのような Le Maître のもとで少年 Racine が薫陶を受けたことは諸家が一致して指摘するところである。前章で見た如く、Le Maître がその死に至るまで常に Racine に保護者として、師として直接的、間接的に影響を及ぼし得る位置にあったことは明らかである。そして本章での検討によって Racine の前にあった Le Maître の人と思想の概略を明らかにすることができたと考える。しかしながらここに至るまでの作業はあくまで Le Maître から Racine への影響の可能性、そしてそのような影響が存在したとすれば Le Maître の人間像から判断して如何なるものであり得たか、を明らかにしたにすぎない。この間の両者の交渉の内容を直接に語る資料は皆無に近く、Racine がその師 Le Maître をその内面に真実如何様に受けとめていたのかを我々は直接窺うことは不可能である。我々に残された唯一とも言える直接の手がかりは 1656 年 3 月の Le Maître から Racine への有名な手紙である。Port-Royal からの退去命令を受け Racine と別れねばならなかった師 Le Maître が与えた手紙は、もとより師から弟子へ何が注がれたかを知る糸口となり得るのみで、Racine の反応を知ることはできない。しかしながらそれは前章と本章を通じて我々が推定しようとしてきた両者の交渉をほぼ裏書きしてくれるかの如くである。そこに於て Le Maître は Racine に必要な本を送るようという用件の他に師としてなすべき、そして常々彼が Racine に身をもって示していたと思われる訓戒をも書き記している。それは目下自分達の身にふりかかっている

る迫害を、俗世からの離脱のために役立てねばならないというものである。弟子 Racine との再会を期して書かれた一節を次に引いてみよう。¹²⁾

« Peut-être que Dieu nous fera revenir où vous êtes. Cependant il faut tâcher de profiter de cette persécution, et de faire qu'elle nous serve à nous détacher du monde, qui nous paroît si ennemi de la piété. Bonjour, mon cher fils; aimez toujours votre papa comme il vous aime. »

この一節は Le Maître が Racine に注いだ愛情を何よりも明瞭に物語っている。そして用件の他に付け加えずにはおれなかった訓戒の内容は既に見てきた Le Maître の隠退宣言の根幹をなす思想に正しく合致するものである。即ち現世を悪、信仰の敵と看做しそこからの離脱を謳っているのである。

このように、我々が Le Maître の思想と行動の中心的内容と考えるものが、彼から Racine に注ぎ込まれていたことを確認して、目を悲劇作品に転ずることにしよう。

註

- 1) Sainte-Beuve : Port-Royal “Bibliothèque de la Pléiade” t. I, p. 397.
- 2) Ibid., p. 398.
- 3) Ibid., p. 398.
- 4) Ibid., p. 401.
- 5) Ibid., p. 401.
- 6) Ibid., p. 402.
- 7) Ibid., p. 398.
- 8) Henri Bremond : Histoire littéraire du sentiment religieux en France, (A. Colin) t. IV, p. 245.
- 9) Lucien Goldmann : Le dieu caché, (Gallimard) p. 127.
- 10) Jean Orcibal : Saint-Cyran et le jansénisme, (Editions du Seuil) p. 109.
- 11) Louis Cognet : Le jansénisme, “Que sais-je?” (P. U. F.) p. 26.
- 12) Sainte-Beuve : op. cit., t. III, pp. 539 ~ 540.

この第二部に於ては、先にも述べた如く、四つの悲劇 *Andromaque*, *Britannicus*, *Bérénice*, *Phèdre* を順次検討してゆくのであるが、それに先立って我々の視点を明らかにしておこう。

これら四つの悲劇はすべて“情念に憑かれた人間”と“道徳律に支配された人間”との“対立”という観点から見ることができる。かつて筆者は *Andromaque*, *Britannicus*, *Bérénice* の三悲劇を取り上げて同様の観点から考察した。¹⁾ そこに於て筆者は“情念に憑かれた人間”達，“道徳律に支配された人間”達それぞれに共通の行動様式，思考形態が存在することを指摘し，三悲劇が両者の“対立”という共通の枠組を内に蔵しつつも，その構造と内容を比較検討してみれば，上記三悲劇が“対立”の徹底化という方向性をもった進化の三つの段階を形成しているとの結論を得た。本稿ではその“対立”が集約的に表現されている場，即ち“道徳律に支配された人間”と“情念に憑かれた人間”の対話の部分を中心に検討を進める。相反する価値観，相容れない道徳律に従う人物間の決して交わることの無い対話，それは両者のいなく相異なる世界観相互の懸隔を益々明瞭にし，その対照性を際立たせるための場として機能していると言えよう。そのような“対立”の場に於て“道徳律に支配された人間”（＝悲劇的人間）は自己の存在にとって絶対不可欠な二つの価値の間で二者択一を迫られるのであるが，もとよりそれは不可能であり，置かれた状況では如何なる解決もあり得ない。進退きわまった“悲劇的人間”は現世に於ける解決を断念し，自己の存在を否定することによって，自身に課した道徳律に殉じようとする。“対立”は“悲劇的人間”の自己否定の瞬間を準備し，その瞬間を一層際立たせるという役割を果していると言えよう。

ところで，先にも触れた通り，師父達との不幸な論争を経た Racine は決定的に劇作の世界に転じて行く。以後 1667 年の *Andromaque* から 1677 年の *Phèdre* に至るまで，彼は次々と作品を発表して行くのであるが，この劇作家としての活動期間中に限り，彼の内面を直接的に窺わせるような書簡類を一切残していないのである。従って我々は Racine に接するに際し作品のみによる他は無い。以下の我々の試みも作品自体の分析によって作品そのものの構造を明かにすることを目的としているが，我々の視点設定の補助手段，あるいは一種の解釈格子として，前章で明らかにした *Le Maître* の思想と行動の構造を使用することをここで断っておきた

い。確かにこれらの作品を構成している題材自体は何ら直接的に Port-Royal や、そこに隠棲した師父達に結びつくものではないことは明白である。しかしながら上記四悲劇に登場する“悲劇的人間”の思想と行動の構造が、Le Maître のそれに相通ずる点を持っているという印象を否定できないことも事実である。

以下の検討を通じて四悲劇の構造を明らかにし、ひいては Le Maître の思想と行動の構造に結びつくものを析出しようというのが第二部の課題である。

註

1) 拙論 Sur trois tragédies de Racine

—— *Andromaque, Britannicus, Bérénice* ——

(昭和 47 年度，修士論文)

Andromaque に於ける“対立”の場は *Andromaque* と *Pyrrhus* によって構成される。従って本章では *Andromaque* と *Pyrrhus* の対話の部分を中心に検討してゆくこととする。

トロイ落城の折、密かに救い出された *Hector* の遺児 *Astyanax* とともに *Andromaque* は *Pyrrhus* のもとで虜囚の憂目をみている。*Pyrrhus* のもとに *Astyanax* が匿われていると知ったギリシア側は、アガメムノンの息子 *Oreste* を使者に立て *Pyrrhus* に *Astyanax* 処刑の要求をつきつける。許婚者 *Hermione* がいるにもかかわらず、*Andromaque* に思いをよせる *Pyrrhus* は、*Astyanax* の生殺与奪の権を握り、*Andromaque* に自分の要求に応ずるように迫る。しかしながら *Andromaque* にとって、亡夫 *Hector* への貞節と、その遺児 *Astyanax* の生命は等しく絶対的な価値であり、一方のために他方を捨てることは不可能である。かくして不可能な状況のもとでそれら二つの価値を守り抜こうとする *Andromaque* と、二者択一を迫る *Pyrrhus* とが“対立”するわけである。

さてその“対立”の具体相を両者の対話の中にみてゆくわけであるが、*Andromaque* はその冒頭の部分で既に“対立”が行き着くはずの結末を予告するかの如く次のように述べている¹⁾。

« Mais il me faut tout perdre, ... (I. 4)

ところが *Pyrrhus* はギリシア方の要求を斥け、自身を犠牲にしても敵の手から *Astyanax* の生命を守り抜こうと *Andromaque* に申し出る²⁾。

« Je ne balance point, je vole à son secours:
« Je défendrai sa vie aux dépens de mes jours. (I. 4)

しかしながらこのような申し出は無償のものではなく *Pyrrhus* は忘れずその代償を要求する³⁾。

« Mais parmi ces périls où je cours pour vous plaire,
« Me refuserez-vous un regard moins sévère? (I. 4)

Andromaque がこのような代償を目的とした提案を受け入れるはずはなく、*Pyrrhus* に対し恋に血迷った男、軟弱なる男と思われて良いのかと戒め、アキレウ

スの息子たる彼のあるべき姿を提示する。⁴⁾

« Sans me faire payer son salut de mon cœur,
« Malgré moi, s'il le faut, lui donner un asile:
« Seigneur, voilà des soins dignes du fils d'Achille. (I.4)

即ち無償の善意こそが囚われの身の弱者への Pyrrhus の取るべき道であるというのが Andromaque の主張である。しかしながらこのような言葉も「トロイに放ったよりもっと激しい炎に身を焼かれている」⁵⁾ Pyrrhus の耳に届こうはずはなく、彼は単にギリシア方の中から Astyanax を護るのみならず、トロイ再興というより大きな代償によって Andromaque の歎心を買おうとする。⁶⁾

« Madame, dites-moi seulement que j'espère,
« Je vous rends votre fils, et je lui sers de père; ...
« Aminé d'un regard, je puis tout entreprendre:
« Votre Ilion encor peut sortir de sa cendre;
« Je puis, en moins de temps que les Grecs ne l'ont pris,
« Dans ses murs relevés couronner votre fils. (I.4)

しかしながらこのような物質的栄華の夢が Andromaque を動かすことはない。Andromaque は端的にこのような世俗的価値を斥ける。⁷⁾

« Seigneur, tant de grandeurs ne nous touchent plus guère: (I.4)

そして Pyrrhus の描いた夢に、彼女の望む境涯を対置する。それはあらゆる世俗的価値から無縁な流謫の境涯である。即ち、Pyrrhus からもギリシア方からも遠く離れ Astyanax とともに亡夫 Hector に涙することである。⁸⁾

« Seigneur: c'est un exil que mes pleurs vous demandent.
« Souffrez que loin des Grecs, et même loin de vous,
« J'aie caché mon fils et pleurer mon époux. (I.4)

更に彼女は、正統なる婚約者 Hermione のもとに帰れという道徳的な要求を Pyrrhus になす。

« Retournez, retournez à la fille d'Hélène. (I.4)

このような対話から、両者を隔てている距離を知ることは容易であろう。即ち、Pyrrhus は Astyanax の生命のために Hector への貞節を犠牲にするという選択が Andromaque にあって可能であると確信しているわけであり、しかもその選択の代償として彼が提示する世俗的栄華という価値が Andromaque の価値体系に於て大きな位置を占めると考えている。しかしながら引用した Andromaque の言葉から明らかなように、上述の如き物質的価値は彼女にとって単に無意味であるのみならず、却って負の価値を有すると言ふべきであろう。Andromaque が望んだのは僻遠の地への追放であり、これは Pyrrhus の価値体系からは到底導き出せぬところである。また Andromaque に Hector への貞節を命ずる彼女の道德律は、Pyrrhus に対しても Hermione への貞節を要求するわけで、両者のいづく価値観、各々を支配する道德律の間に横たわる断絶を我々は認めないわけにはいかないだろう。両者間の懸隔がかくの如くである以上、対話とはいえ、それは各々の一方的な自己主張の場としての性格を帯びざるを得ない。従って Pyrrhus は、Andromaque の自発的合意を得ることは不可能であり、残された手段は脅迫のみである。¹⁰⁾

« ... il faut désormais que mon cœur,
« S'il n'aime avec transport, haisse avec fureur.
« Je n'épargnerai rien dans ma juste colère:
« Le fils me répondra des mépris de la mère;
« La Grèce le demande, et je ne prétends pas
« Mettre toujours ma gloire à sauver des ingrats. (I. 4)

このようにあくまでも二者択一を迫る Pyrrhus を前にしては、Andromaque はすべてを諦めて捨て去らざるを得ず、死に赴く道以外は残されていない。¹¹⁾

« Et peut-être après tout, en l'état où je suis,
« Sa mort avancera la fin de mes ennuis.
« Je prolongeais pour lui ma vie et ma misère;
« Mais enfin sur ses pas j'irai revoir son père.
« Ainsi tous trois, Seigneur, par vos soins réunis, (I. 4)

この Andromaque の言葉を見れば彼女が「自己の置かれた状況」、即ち Pyrrhus との間に存在する根源的な理解不能を十分認識していることは明らかである。これまでの Andromaque の主張を見るかぎり、彼女が Hector への不貞によって As-

tyanax の生命をあがなうという妥協の道を選ぶことはあり得ない。しかるに情念に支配され盲目となった Pyrrhus はあくまで妥協の希望を捨てず、Andromaque の思いがけぬ抵抗にあうと怒りにかられて脅迫によってそれを完遂しようとする。Pyrrhus がそのような手段を取るかぎり、Andromaque は二者択一の拒否の意志表示は死によってなす他はない。つまりここに於て Andromaque は Pyrrhus の提出する妥協の論理を拒否し、“全か無か”という彼女の行動基準を提示していると言えよう。

とはいえ子供を人質にとられた母親の内面はもとよりそれ程単純であるはずがない。当初の Andromaque の毅然たる態度は Pyrrhus の攻勢の前に徐々に崩れ、彼女は守勢に転じてゆくことになる。第三幕第六場での両者のやりとりは極めて微妙であり、Andromaque は Pyrrhus に取りすがらんばかりにして息子の助命を乞うのである。そこでは Andromaque は先に Pyrrhus が示していた厚意を指摘し、彼の態度の急変をなじり、恨み言さえ述べるに至る。¹²⁾

« Vos serments m'ont tantôt juré tant d'amitié!
« Dieux! ne pourrai-je au moins toucher votre pitié?
« Sans espoir de pardon m'avez-vous condamnée? (III.6)

« Vous qui braviez pour moi tant de périls divers! (III.6)

ここでの Andromaque の一連の言葉は Pyrrhus への媚態と呼んでも殆ど差し支えない。また Céphise への言葉が示しているように Andromaque は Pyrrhus に対し彼女の「まなざしの力 (le pouvoir de mes yeux) ¹³⁾」を試していたはずである。

しかしながら、このような Andromaque の下手からの懇願を、優位に転じた Pyrrhus は冷酷に斥ける。¹⁴⁾

« J'étais aveugle alors : mes yeux se sont ouverts. (III.6)

Pyrrhus の様々な好意的な申し出もすべて恋に盲目となったがためであり、今や目が醒めたというわけである。つまり我々が先に指摘した情念による盲目性を Pyrrhus 自ら確認していることになる。(なお付言しておく、この盲目性の内容に

関して、これに先立って Pyrrhus 自身が触れている。それは Andromaque が簡単に妥協に応ずると考えていた Pyrrhus の錯誤についてである。)¹⁵⁾

« Je pensais, en voyant sa tendresse alarmée,
« Que son fils me la dût renvoyer désarmée. (II. 5)

とはいえ「今や目が醒めた」との言葉とは裏腹に Pyrrhus のその後の行為は、彼が一貫して盲目であることを示している。

Pyrrhus は相変らず脅迫を繰り返し二者択一を迫る¹⁶⁾

« Pour la dernière fois, sauvez-le, sauvez-nous. ...
« Mais ce n'est plus, Madame, une offre à dédaigner:
« Je vous le dis, il faut ou périr ou régner. ...
« Et là vous me verrez, soumis ou furieux,
« Vous couronner, Madame, ou le perdre à vos yeux. (III. 7)

かくして Andromaque は我が子の死を自ら決めざるを得ない立場に追い込まれる。¹⁷⁾

« Il ne me restait plus qu'à condamner mon fils. (III. 8)

しかしながら、勿論母としての情はそれを許すはずがなく、Andromaque はそれを打ち消して次の如く言う。¹⁸⁾

« Non, tu ne mourras point : je ne le puis souffrir. (III. 8)

取るべき二つの道の前に進退きわまった Andromaque は次の如く述べて Hector の墓へ伺を立てに行く。¹⁹⁾

« Allons sur son tombeau consulter mon époux. (III. 8)

そして戻って来た Andromaque の言葉は最後の別れに Astyanax に会いに行くというものである。²⁰⁾

« Céphise, allons le voir pour la dernière fois. (IV. 1)

ここまでの Andromaque の言動からすれば、この言葉は彼女がすべてを断念し、自己の存在をも否定する決意を固めたことを意味していると考えるべきであろう。

事実これに続く Céphise への言葉の中で彼女は自殺の決意を明らかにする。しかしその執行までに一つの計略が秘められていることが同時に Andromaque の口から明らかにされるのである。即ち Pyrrhus の要求を受け容れることによって Astyanax の生命の保証を得た後、夫を裏切った自身を罰すべく自らの手で命を断つというのがその計略の内容である。²¹⁾

« Je vais donc, puisqu'il faut que je me sacrifie,
« Assurer à Pyrrhus le reste de ma vie;
« Je vais, en recevant sa foi sur les autels,
« L'engager à mon fils par des nœuds immortels.
« Mais aussitôt ma main, à moi seule funeste,
« D'une infidèle vie abrégera le reste,
« Et sauvant ma vertu, rendra ce que je doi
« A Pyrrhus, à mon fils, à mon époux, à moi. ...
« Voilà ce qu'un époux m'a commandé lui-même. (IV. 1)

表面的には Pyrrhus に屈し、形式上 Hector への貞節を犠牲にすることになるが、即刻自殺することによって実質的にはそれを守り抜くというのがこの計略の眼目である。しかしながらそのような計画が Andromaque の思惑通り成功するとは考え難い。と言うのは欺かれた Pyrrhus が約束通り Astyanax の生命を守るとは思えないからである。Andromaque が明晰な状況認識をもっていることは既に指摘したが、これは母親としての弱さが彼女の事態を見る目を曇らせてしまったがための錯誤と言えよう。

しかしながら Pyrrhus は Oreste の手によって暗殺され、Andromaque の自決の計画は意図されたのみで実行されずに終わってしまうこととなる。Andromaque を支配している道德律からすれば、本来 Pyrrhus との間には如何なる妥協の余地も存在しなかった。Pyrrhus との“対立”の場に於て彼女は自身の行動基準、価値体系を明らかにしてきた。にもかかわらず彼女はそれを貫き通し、Pyrrhus に徹底的な拒否を対置することができず最終的には妥協に応ずることになる。しかも彼女が妥協に応じた自身を罰すべく決意した自己否定も Pyrrhus の突然の横死によって中断されてしまうのである。

かくして Andromaque に於て“対立” (Andromaque ↔ Pyrrhus) は後の悲劇に継承されることになるすべての枠組を提示しながらも、極限にまで押し進められることなく、可能性の段階でとどまるのである。

- 1) Racine : Œuvres complètes, “Bibliothèque de la Pléiade” t. I, p. 254.
- 2) Ibid., p. 255.
- 3) Ibid., p. 255.
- 4) Ibid., p. 255.
- 5) Ibid., p. 255.
- 6) Ibid., pp. 255 ~ 256.
- 7) Ibid., p. 256.
- 8) Ibid., p. 256.
- 9) Ibid., p. 256.
- 10) Ibid., p. 257.
- 11) Ibid., p. 257.
- 12) Ibid., pp. 276 ~ 277.
- 13) Ibid., p. 276.
- 14) Ibid., p. 277.
- 15) Ibid., p. 266.
- 16) Ibid., pp. 278 ~ 279.
- 17) Ibid., p. 279.
- 18) Ibid., p. 281.
- 19) Ibid., p. 281.
- 20) Ibid., p. 282.
- 21) Ibid., p. 283.

Britannicus に於て、前述の如き意味での“対立”は *Néron* と *Junie* の対話に見ることができる。

成程この悲劇の主題は *Néron* と *Agrippine* との一つの玉座をめぐる争い、*Néron* が母親の軛から脱するまでの両者の葛藤であり、*Britannicus* と *Junie*、彼らの悲恋は附随的役割を演ずるにすぎないとも言えよう。しかしながら、我々の観点からすれば、*Néron* と *Agrippine* の各々の奉ずる価値観や行動基準には本質的な相違は存在せず、両者間の葛藤はあくまで同一平面上のものであり、そこに決定的な断絶をみることはできない。

従ってここでは *Junie* と *Néron* の対話の部分を中心に検討をすすめてゆくこととする。

母后 *Agrippine* の絶大な権力の下にあった *Néron* は、今ようやく被支配の眠りから覚めようとしている。ローマ皇帝の実権を握っていた母親への反逆の一手段として息子 *Néron* が打ち出したのは、*Britannicus* と愛し合っていた *Junie* の誘拐であった。皇帝への正統の血筋にありながら、権力欲に取り憑かれた *Agrippine* の陰謀によって失墜した *Britannicus* は、その同じ *Agrippine* から、*Néron* への牽制手段として *Junie* とともに庇護を受けていたからである。宮廷に引き立てられてきた *Junie* の姿が松明の光によって闇の中に浮かびあがるのを目にした *Néron* は彼女に対し、*Andromaque* の *Pyrrhus* と同様に不倫の激しい情熱にとらわれる。突然の恋に動転した *Néron* の自失振りはそれを目のあたりにした *Narcisse* の次の言葉によって明らかだろう。¹⁾

« Mais que vois-je? Vous-même, inquiet, étonné,
« Plus que *Britannicus* paraissent consterné. (II. 2)

これに対する *Néron* 自身の説明は次の通りである。²⁾

« *Narcisse*, c'en est fait, *Néron* est amoureux.
« Depuis un moment, mais pour toute ma vie
« J'aime (que dis-je aimer?), j'idolâtre *Junie*. (II. 2)

即ち、*Néron* は我々の前に“情念に取り憑かれた人間”として姿を現すのである。

常に Néron の心理の奥底まで読み取り、巧妙に彼を悪の方向へ誘導してゆく Narcisse は、彼に向って皇帝の地位の栄華をもって眩惑すれば愛せよと命ずるだけで Junie の心は意のままになるであろうと次の如く誘いかける³⁾

« Quand elle vous verra, de ce degré de gloire,
« Venir en soupirant avouer sa victoire:
« Maître, n'en doutez point, d'un cœur déjà charmé,
« Commandez qu'on vous aime, et vous serez aimé. (II. 2)

Néron はこの Narcisse の言葉に従って Junie に后妃の位を提供して彼の意に従うよう要求する。もとより Britannicus と愛し合う Junie がそれに応ずるはずはなく、これに対し Junie は罪人として宮廷に拉致されるという恥辱を受ける理由もなければ、后妃という過分の名誉を受ける理由もないと斥ける⁴⁾

« Vous m'offrez tout d'un coup la place d'Octavie
« J'ose dire pourtant que je n'ai mérité
« Ni cet excès d'honneur, ni cette indignité. (II. 3)

即ち、Junie は彼女にとって正当な理由のない行為は、たとえ全能の皇帝の命令であれとらないという態度を示しているのである。そしてそのような態度の由来を説明して次の如く述べる⁵⁾

« Et pouvez-vous, Seigneur, souhaiter qu'une fille
« Qui vit presque en naissant éteindre sa famille,
« Qui dans l'obscurité nourrissant sa douleur,
« S'est fait une vertu conforme à son malheur,
« Passe subitement de cette nuit profonde
« Dans un rang qui l'expose aux yeux de tout le monde,
« Dont je n'ai pu de loin soutenir la clarté,
« Et dont une autre enfin remplit la majesté? (II. 3)

即ち Junie は自身の生い立って来た環境を obscurité, 更には nuit profonde と呼んでいるわけで、彼女の本来あるべき位置は権勢や栄華からは程遠く人目を引くこともない密やかなものであるということである。「その身の不幸に相応しい美徳を身につけてきた Junie にとって、Néron の提供するような輝かしい、しかも正妻 Octavie のものである地位に心惹かれるわけはなかった。Narcisse の授

けた策に従って Néron がその要求の代償として提供した世俗的栄華は Junie には一顧の価値さえ無かったわけで、正にここで Néron と Junie の物質的栄華という価値とその役割をめぐって正反対の評価が明らかになるわけである。Junie が政治的権勢の地位を斥け、その対極にある不運の境遇こそが自身に適っていると主張するのみならず、Néron の正妃 Octavie の名を持ち出して Néron の申し出を断るところは、Andromaque が Pyrrhus に正統なる婚約者 Hermione のもとに戻れという道徳的主張を述べる場面と照応しているといえよう。

Junie のこのような堅固な道徳性に接し、Néron は「拒否の栄光」を選んでではなく、後悔の種となると威嚇する。⁶⁾

« Et ne préférez point à la solide gloire
« Des honneurs dont César prétend vous revêtir,
« La gloire d'un refus, sujet au repentir. (II. 3)

このような威嚇に対し Junie は再度同内容の、しかしより明瞭な直接的表現で拒絶する。これは Junie の考え方を明らかにする上で有効であるため、重複するが次に引いてみよう。⁷⁾

« Le ciel connaît, Seigneur, le fond de ma pensée.
« Je ne me flatte point d'une gloire insensée:
« Je sais de vos présents mesurer la grandeur;
« Mais plus ce rang sur moi répandrait de splendeur,
« Plus il me ferait honte, et mettrait en lumière
« Le crime d'en avoir dépouillé l'héritière. (II. 3)

引用の第一行目で、彼女は Néron に自分の考えは天も照覧するところであると言明するわけで、彼女が明晰な自己認識をもっていることを窺うことができる。引用の第二行目からは Junie の思想の主に価値観にかかわる側面を知ることができる。即ち Néron の提案が彼女にとって全く荒唐無稽であることを示している。引用の四行目から六行目までに於ては、彼女を支配する道徳律を知ることができる。それは彼女に正妃の地位を篡奪するという破廉恥な罪悪を許さないことを示している。

ここに至るまで Junie は自身の口からは Britannicus への愛に触れなかったが、Néron にそれを指摘されると、彼への愛の性質を自ら説明して次の如く述べる。⁸⁾

« Mais ces mêmes malheurs qui l'en ont écarté,

« Ses honneurs abolis, son palais déserté,
« La fuite d'une cour que sa chute a bannie,
« Sont autant de liens qui retiennent Junie.

(II. 3)

即ち、本来即くべき皇位から遠ざけられ、物質的、世俗的栄華から見放された Britannicus の境涯こそが自身を彼に結び付ける絆となっていると言明するのである。このように世俗的価値と權威が Junie にとって無価値であることを明らかにした上で、敢えて世俗的栄華と歓楽に包まれた Néron の境涯を Britannicus の境涯に對置するのである。⁹⁾

« Tout ce que vous voyez conspire à vos désirs;
« Vos jours toujours sereins coulent dans les plaisirs.
« L'Empire en est pour vous l'inépuisable source;

(II. 3)

ここに於て Junie は皇帝 Néron を前にしてその權威と価値を全面的に否定し、彼とは對極的な位置にあって Néron (Narcisse) の価値体系に於ては全くの無価値として貶められている Britannicus の方を善しとするわけで、彼女は自己の価値観を明瞭にするとともに、皇帝の面前で価値転倒をやつてのけたことになる。

このような Junie に対しては Néron にはもはや脅迫以外の手段は残されていない。彼は Britannicus の生命をおびやかして Junie に次の如く迫る。¹⁰⁾

« Si ses jours vous sont chers, éloignez-le de vous
« Sans qu'il ait aucun lieu de me croire jaloux.

(II. 3)

しかも Néron は身を隠してその場の様子を窺つていようというのである。Junie はここで Andromaque 同様に二つの価値 (Britannicus の生命か、Britannicus への貞節か) の間で二者択一を迫られるわけである。しかしながら、二つの価値は Junie にとってはともに絶対的であり、一方のために他方を犠牲にすることは不可能である。まして Néron の監視下で自身の手で Britannicus を遠ざけるなどということができようはずがなく、彼女は次の如く返答する。¹¹⁾

« Hélas! si j'ose encor former quelques souhaits,
« Seigneur, permettez-moi de ne le voir jamais.

(II. 3)

Britannicus と会わずともすむようにという Junie の言葉は、Néron によって仕組まれたそのような理不尽な状況への拒否を意味しているといえよう。更に言えば、

一方のために他方を捨てるくらいなら、すべてを諦める方が良い、というのがこの言葉の真意であろう。

この Junie の言葉の意味がより明瞭な形を取るのは第三幕第八場である。即ち、Néron と Britannicus の争いを眼前にして彼女は Vesta の神殿に身を隠す覚悟を明らかにする。¹²⁾

« Souffrez que de vos cœurs rapprochant les liens,
« Je me cache à vos yeux, et me dérobe aux siens.
« Ma fuite arrêtera vos discordes fatales;
« Seigneur, j'irai remplir le nombre des Vestales. (III. 8)

Britannicus の死か、彼への不貞か、という不可能な二者択一を迫られて、Junie はそのような状況のみならず、そこでの自己の存在をも否定しようというのである。何故ならば Vesta の神殿に巫女として身を投ずるということは、以後の生を神にのみ捧げることになるからである。従って、当然のことながら現世での Britannicus との愛を断念することになるが、それは Junie にとっては二つの価値を同時に守り抜くことが出来ない以上、一方のみを実現することは無意味だからである。このような Junie の行動基準を一言で言えば“全か無か”ということになり、そこには如何なる妥協の余地も存在しない。このことは先に引いた第二幕第三場の Junie の言葉の中に既に明らかにされていた。にもかかわらずこのような行動基準も、そこから導き出される行動様式も Néron にとって理解の埒外にあり、Junie の意図を耳にした Néron はそれを奇妙で唐突なものとしか受け取ることができないのである。¹³⁾

« L'entreprise, Madame, est étrange et soudaine. (III. 8)

この Néron の言葉は、彼と Junie の間に横たわる断絶を示して余りあるといえよう。このように Néron は自身と Junie との懸隔を認識することなく、彼女に対しては終始無理解と脅迫をもって応ずるわけである。

ところで先に Junie の明晰な自己認識について触れたが、彼女の認識は単に自己の内面のみにとはとどまらず、彼女を取り巻く状況全体に及んでいる。彼女は Néron とその宮廷を支配している行動基準が自身のそれとは如何に隔たっていることか、またそこでの生活が如何に彼女自身の生き方とは無縁であるかを知悉している。例えば第五幕第一場で Junie は Britannicus に次の如く言っている¹⁴⁾。

≪ . . . dans cette cour
 ≪ Combien tout ce qu'on dit est loin de ce qu'on pense!
 ≪ Que la bouche et le cœur sont peu d'intelligence!
 ≪ Avec combien de joie on y trahit sa foi!
 ≪ Quel séjour étranger et pour vous et pour moi! (V. 1)

このように事態を認識している Junie とは対照的に、Britannicus は終始状況に対して盲目であり、常に錯誤に陥っている。彼の言動を振り返ってみると、例えば彼を欺いている Narcisse の言葉を信じて嫉妬に駆られて Junie について次の如く言っている。¹⁵⁾

≪ . . . je la crois, Narcisse, ingrate, criminelle,
 ≪ Digne de mon courroux ... (III. 6)

また、先に見た通り、Néron の提供した世俗的栄華に一切目もくれなかった Junie その人に向って次の如く述べている。¹⁶⁾

≪ Je ne murmure point . . .
 ≪ Que l'éclat d'un empire ait pu vous éblouir,
 ≪ Qu'aux dépens de ma sœur vous en vouliez jouir; (III. 7)

このような Britannicus であってみれば、彼を暗殺すべく設けられた祝宴の罟を見抜くことができないのも当然である。危険を見抜いた Junie のこれが最後になるのではという次の如き不安をも無視して彼はそこに赴くことになる。¹⁷⁾

≪ Et si je vous parlais pour la dernière fois! (V. 1)

事態は Junie のこのような不吉な予想の通り進展し、Britannicus はその祝宴で敢え無く毒殺される。Junie は当初の言葉通り現世での生を捨て Vesta の神殿に身を捧げる。皇帝ですら手の届かぬ聖域に入ることによって、Néron にとって死者同様の身となり、彼に永遠の苦悩を与えんがためである。かくして Junie は、脅迫という暴力的手段をもって二者択一を迫る Néron に対し、妥協を拒否し徹底的な抵抗を貫き通すわけである。Néron の言う「拒否の栄光」を選ぶことによって Britannicus の生命を奪われはするが、Junie は現世を離脱することによって Britannicus への貞節という精神的、道徳的価値を護り抜くのである。“情念に憑かれた人間”達の無理解と盲目性に取り囲まれた中で、Junie は最初に明らかにした

自己の価値観、行動基準を一切変えることなく、あらゆる妥協を排して行動し抜くわけであり；その意味に於て、彼女は自己の道徳律に殉じたと言えよう。Junieは“道徳律に支配された人間”として首尾一貫した行動をとるわけで、*Andromaque*に於ける *Andromaque* ↔ *Pyrrhus* の“対立”とほぼ同じ枠組をもちながら、Junie ↔ *Néron* の“対立”は極限にまで押し進められたと言えよう。

註

- 1) Racine : Œuvres complètes, “Bibliothèque de la Pléiade”, t. I, p. 404.
- 2) Ibid., pp. 404 ~ 405.
- 3) Ibid., p. 407
- 4) Ibid., p. 412.
- 5) Ibid., p. 412.
- 6) Ibid., p. 412.
- 7) Ibid., pp. 412 ~ 413.
- 8) Ibid., p. 413.
- 9) Ibid., p. 413.
- 10) Ibid., p. 414.
- 11) Ibid., p. 414.
- 12) Ibid., p. 430.
- 13) Ibid., p. 430.
- 14) Ibid., p. 444.
- 15) Ibid., p. 424.
- 16) Ibid., p. 426.
- 17) Ibid., p. 445.

*Bérénice*に於て“対立”するのは Titus と *Bérénice* である。

父帝 *Vespasien* の死によりローマ皇帝の位に即くことになった Titus は、東方パレスチナの女王 *Bérénice* を后妃とするつもりでいた。しかし、ローマの民衆は古来王族の血を憎み、その掟は異国の女王を后妃に戴くことを認めない。Titus にとって、皇帝としての治世の第一歩から万古不易のローマの大法を犯して異国の女王を娶るという不名誉は許されず、また、*Bérénice* への愛を断ち切ることも不可能である。*Bérénice* もまた容易に別離を承諾しようとはしない。即ち、Titus はローマ皇帝としての名誉か、*Bérénice* への愛か、換言すれば、ローマの民意に従うか、*Bérénice* の意志に従うかという岐路に立ち、不可能な二者択一を迫られているわけである。

さて、上記の如き状況のもとでの *Bérénice*, Titus 両者間の対話が如何なる過程を経て、如何なる結末に至るか、それを具体的に辿ることによって両者の“対立”の相を明らかにしようというのが本章の課題である。

Bérénice, Titus は会見に先立って各々の胸中を明かすが、それに依ってみるならば両者の行動様式の相違は早くも明らかである。

Bérénice は先ず *Antiochus* を相手に、Titus の最近の態度の変化が彼の心变りの故ではないかと考え、不安を訴える。次いで、*confidente* の *Phénice* が、ローマは異国の女王に厳しい目を向けていることを指摘すると、今度は一転して、Titus の愛は変らぬこと、皇帝は全能であり彼の一言ですべてが可能になることを説き、*Phénice* の不安を斥ける¹⁾。

« Le temps n'est plus, *Phénice*, où je pouvais trembler.

« Titus m'aime, il peut tout, il n'a plus qu'à parler.

(I. 5)

しかし結果から言うと、Titus の愛には変化は無く、先の *Bérénice* の不安は事実無根であり、後の安心は Titus の固めた決意の内容とは裏腹であり、ともに錯誤である。即ち、*Bérénice* は自己が置かれた状況を認識することなく根拠の無い不安と希望の間を揺れ動く“情念に憑かれた人間”特有の盲目性を明瞭に示していると言えよう。

これに対し、Titus の *Paulin* との対話からは、*Bérénice* のそれとは対照的な

Titus の行動様式の特徴が明らかとなる。Titus はローマの民意が自身にとって残酷なものであることを予期しながら、そこから目をそむけようとはせず、敢えて Paulin に真実を告げるよう命ずる。²⁾

« J'ai voulu que des cœurs vous fussiez l'interprète,
« Qu'au travers des flatteurs votre sincérité
« Fit toujours jusqu'à moi passer la vérité.
« Parlez donc. ...

(II. 2)

つまり Titus は自己を取り巻く現実を直視し、状況を認識しようという意思を明瞭に示していると言えよう。ところでこのような姿勢は“道徳律に支配された人間”の特徴であり、Titus と Bérénice が“道徳律に支配された人間”と“情念に憑かれた人間”として“対立”するであろうことが予見される。

さて、このような二人が実際に言葉を交わすのは第二幕第四場であるが、Titus の言に依ればこれが Bérénice との最後の会見となるはずである。³⁾

« Et je vais lui parler pour la dernière fois.

(II. 2)

何故ならば Titus は既に Bérénice との別離の決意を固めており、残された問題はそれを Bérénice に言い渡し、その意味内容を理解させ、自発的な合意を得ることだからである。

それでは Titus の決意とは如何なるものであろうか。我々は先ず Titus の決意の内容、そしてそれを固めるに至った彼の内面の経緯、つまり彼の思想と行動基準を彼の言葉に即して検討する。そのような作業の後、その決意への Bérénice の対応の様相を見ることとする。

Titus の決意の内容は彼の confident である Paulin への言葉に示されている。即ち、Titus は身に負わされた重責のため、愛し合う Bérénice はおろか、自分自身をも捨て去らねばならないことを悟ったとして次の如く言う。⁴⁾

« Je connus que bientôt, loin d'être à ce que j'aime,
« Il fallait, cher Paulin, renoncer à moi-même;

(II. 2)

それでは Titus が Bérénice のみならず、自身をも犠牲にして護ろうという「名譽」とは一体如何なるものであろうか。皇帝としての治世の第一歩から一身の幸福のためにローマの法を踏み躪ることは許されないという Paulin への言葉にその一

端を見ることができよう。⁵⁾

« Rome observe aujourd'hui ma conduite nouvelle.
« Quelle honte pour moi, quel présage pour elle,
« Si dès le premier pas, renversant tous ses droits,
« Je fondais mon bonheur sur le débris des lois!

(II. 2)

しかもこのような行為は単に皇帝としての名誉に悖るのみではない。ローマの名誉、その民衆の名誉をも蹂躪することを意味するというのが Titus の考えである。もし敢えて法を犯せば、ローマの民衆は怒り立ち Bérénice の送還を迫るであろう。そのような恥辱に自身と Bérénice の名を晒すことはできないと Titus は Antiochus に言う。⁶⁾

« Sauvons de cet affront mon nom et sa mémoire;
« Et puisqu'il faut céder, cédon's à notre gloire.

(III. 1)

これらの言葉から察することができるのは、Titus の言う「名誉」とは積極的な価値であるよりはむしろ「恥辱」(honte, affront) を避けるという消極的な行為と等価とされていることである。成程 Titus は gloire という言葉を使っている。がしかしそれは決して Corneille 的な雄々しく栄光に満ちた意志の力を誇示するものではない。Titus の内面がそうしたことから如何に隔っているかは次に引く彼の言葉から明らかであろう。例えば Antiochus に対し、数々の世俗的栄光に包まれた自己の身の上を嘆いて次の如く言う。⁷⁾

« Plaignez ma grandeur importune.

(III. 1)

また、Bérénice に別離の決意を告げた後、Paulin が後世に残る Titus の名声を口にする、彼は次のように言ってそれを斥ける。⁸⁾

« Non, je suis un barbare.
« Moi-même je me hais.

« Ah, Rome! Ah, Bérénice! Ah, prince malheureux!
« Pourquoi suis-je empereur? Pourquoi suis-je amoureux?

(IV. 6)

Titus にとって、皇帝としての名誉と Bérénice への愛はともに絶対的な価値で

あり、一方のために他方を犠牲にすることはできないということは既に触れた。それでは「名誉」のために自己を犠牲にする決意を固めた Titus の内部に於て Bérénice への愛はどのような形態をとるのであろうか。

先の引用からも理解できるように Titus の内面に於て二つの価値は同等の比重をもっている。成程 Titus は皇帝としてとどまり、Bérénice との別離を決意したが、それは愛を断ち切ったことを意味しない。それどころか彼の愛は変わらず別離の後の彼の生は悲哀と苦悩に打ちひしがれた流離の身に等しいであろう。彼は Antiochus に Bérénice への伝言を頼み次のように述べる。⁹⁾

« Ah! Prince, jurez-lui que toujours trop fidèle,
« Gémissant dans ma cour, et plus exilé qu'elle,
« Portant jusqu'au tombeau le nom de son amant,
« Mon règne ne sera qu'un long bannissement, (III, 1)

また Bérénice に自己の意図を説明する箇所にも Titus はこれとほぼ同じ内容のことを語っている。¹⁰⁾

« Je sais tous les tourments où ce dessein me livre;
« Je sens bien que sans vous je ne saurais plus vivre,
« Que mon cœur de moi-même est prêt à s'éloigner;
« Mais il ne s'agit plus de vivre, il faut régner. (IV. 5)

これらの言葉は、外面的には皇帝としての名誉を護ったかに見える Titus の内面が実際には如何なるものであるかを明らかにしている。即ち彼の内面はすべて Bérénice に捧げられており、皇帝としてローマに留まりながら、その魂は Bérénice を追って東方へ飛び去ってしまうであろうというのである。皇帝の地位は単に「煩わしい」ものであるにとどまらない。そこに留まることは Titus にとって生きながらの死、否死以上の苦しみを意味するのである。成程 Titus は皇帝の名誉と責務、治世という大義を口にはする。がしかし Bérénice との別離の後の彼は正に生ける屍となるであろうことは明白である。従ってそのような彼の視野から、真正な意味での政治は完全に欠落していると言わざるを得ないだろう。

皇帝としての名誉と Bérénice への愛という Titus にとって絶対不可欠でしかも置かれた状況では相容れない二つの価値を両立させるべく彼が見出した道は、外面を皇帝の名誉に捧げ、内面を Bérénice への愛に捧げるというものであった。そこ

では二つの価値の実質的側面が捨象され、ともに道德的、精神的側面のみが問題となっている。即ち皇帝としての義務たる政治は皇帝の名誉へ、Bérénice との愛の実現は Bérénice への永遠の貞節へと二つの価値はそれぞれ質的転換がなされているといえよう。このような Titus の論理は Bérénice に対しては必然的に逆説の形を取るようになる。即ち、別離を宣告するにもかかわらず Bérénice を愛している、もしくは、Bérénice を愛しその名誉を護らんがために別れる、というのがそれである。上記の如き道を選んだ Titus にとって唯一の救いの条件は Bérénice が彼の示した逆説的な論理を理解し、彼の死にもまさる苦しみを共有することである。もし理解が得られぬ場合、Titus の行為は Bérénice にとっては残酷な裏切りでしかないだろうからである。事実、通常 の論理に従い内面と外面の一致を要求する Bérénice はこの Titus の屈折した論理を理解しない。それを最も端的に示しているのは、Titus が別離を宣告する今程 Bérénice を深く愛したことはないと言ふ場面での両者の対話である。¹¹⁾

« Connaissez-moi, Madame, . . .

« Ce jour surpasse tout. Jamais, je le confesse,

« Vous ne fûtes aimée avec tant de tendresse;

« Et jamais . . .

(V. 5)

このような Titus の言葉に対する Bérénice の返答は次の通りである。¹²⁾

« Vous m'aimez, vous me le soutenez;

« Et cependant je pars, et vous me l'ordonnez! . . .

« Ah, cruel! . . .

« Et laissez-moi du moins partir persuadée

« Que déjà de votre âme exilée en secret,

« J'abandonne un ingrat qui me perd sans regret.

(V. 5)

Bérénice にとって別離の宣告は愛の消滅を意味し、Titus は残酷な裏切り者であるわけで、両者の間の懸隔はおおいがたい。この隔絶を如何にして埋めるかというのが Titus にとっての最大の問題であるが、ここでこれまでの Bérénice の行動様式を簡単に振り返ってみることとする。先にも触れた通り、ここに至るまでの Bérénice の行動は“情念に憑かれた人間”としての特徴を示してきた。例えば Antiochus の口を通じて Titus の決意を知らされた Bérénice は現実を見極めようとはせず、それを Antiochus の企みとして、自ら錯誤の中にとじこもろうとした。¹³⁾

« Hélas! pour me tromper je fais ce que je puis.

(III. 3)

また、Titus のもとに遣わした Phénice の帰りを待ちつつ、不安と怒りに駆られて Titus を ingrat であるとして罵って次の如く独語する。¹⁴⁾

« Titus, l'ingrat Titus n'a point voulu l'entendre:

« Il fuit, il se dérobe à ma juste fureur.

(IV. 1)

自己を取り巻く事態を認識できず錯誤に陥ること、嫉妬から愛する者を ingrat と責めること、これらの行為はすべて“情念に憑かれた人間”を特徴付けるものであった事を指摘しておこう。

このような Bérénice がその行動基準に於て Titus のそれと際立った対照性を示している部分をここで検討しておくこととする。

ローマの掟に殉ずる覚悟を語る Titus に対して Bérénice はローマの法は不当であり、皇帝たる Titus にはそれを改変する権利があるのではないかと妥協の道を強いる。¹⁵⁾

« Quoi? pour d'injustes lois que vous pouvez changer,

« En d'éternels chagrins vous-même vous plonger?

« Rome a ses droits, Seigneur. N'avez-vous pas les vôtres?

« Ses intérêts sont-ils plus sacrés que les nôtres?

« Dites, parlez.

(IV. 5)

つまり Bérénice は一方の価値のためには他方を犠牲にするという二者択一の原理に従って要求するわけであり、しかもこれを自己の正当なる要求として述べる点に於て、正に Andromaque に対する Pyrrhus、Junie に対する Néron の位置に身を置いていると言えよう。

ところで、Titus もまたこの Bérénice の主張と同じ妥協の道に思い至らなかったわけではない。ローマが彼の味方かもしれぬと彼は独語する。¹⁶⁾

« Rome sera pour nous. Titus, ouvre les yeux!

(IV. 4)

しかしすぐさま彼は事態を直視することを自身に命じ一瞬の錯誤から目覚める。そしてローマの王族への憎しみと、自身の背負う義務を再確認してから Bérénice にも同じように事態を認識するよう次の如く要求する。¹⁷⁾

≪ Et d'un oeil que la gloire et la raison éclaire,
≪ Contemplez mon devoir dans toute sa rigueur.

(IV. 5)

つまりこの同じ妥協案に対する二人の態度の相違をみても、Bérénice と Titus の“対立”の構造が、先行の悲劇のそれと酷似していることは容易に認められるだろう。

以上の如く“情念に憑かれた人間”として Titus に“無理解”を対置する Bérénice に、彼は死の決意を示す。“名誉”と“愛”の双方を救う道がとざされるとすれば、すべてを捨て去る道、すなわち死以外には残されていないというのが Titus の立場である。ここに於て Titus は“全か無か”という Junie と共通する行動基準を提示しているわけであり、その意味に於ても、Junie と Néron の“対立”の図式をここに見ることができよう。ところが、先の悲劇と決定的に相違するのは、Bérénice が Titus の死の決意、すなわち“無”を選ぶという覚悟を知って、Titus を理解し、彼の示す道に同意することである。先に指摘した両者の間の断絶は Bérénice の理解によって解消されたわけである。

それでは如何なる理由によってこのような転換が可能となったのであろうか。ここまで我々は両者の“対立”の側面のみに注目してきた。しかし Bérénice の行動は全面的に“情念に憑かれた人間”達のそれと重なりあうものではなく、彼女の価値観は彼らのそれとは根本的に相違するものである。Pyrrhus や Néron にあつては物質的栄華が至上の価値をもち、その威光を借りれば、“愛”をも買うことができるかの如く彼らは振舞っていた。しかし Bérénice は終始物質的栄華には価値を認めず、それを明言してきた。例えば第一幕第四場で既に彼女は Antiochus に向い、Titus その人を愛すること、彼の栄華は問題ではないことを確言している。¹⁸⁾

≪ Jugez de ma douleur, moi dont l'ardeur extrême,
≪ Je vous l'ai dit cent fois, n'aime en lui que lui-même;
≪ Moi qui, loin des grandeurs dont il est revêtu,
≪ Aurais choisi son cœur, et cherché sa vertu.

(I. 4)

また第二幕第四場でも同じことを語っている¹⁹⁾

≪ Depuis quand croyez-vous que ma grandeur me touche?
≪ Un soupir, un regard, un mot de votre bouche,

≪Voilà l'ambition d'un cœur comme le mien.
≪Voyez-moi plus souvent, et ne me donnez rien.

(II. 4)

しかし、このような言葉を聞くまでもなく Titus は Bérénice が彼の心のみを求めていることを知り抜いていた。²⁰⁾

≪Je connais Bérénice, et ne sais que trop bien
≪Que son cœur n'a jamais demandé que le mien.

(II. 2)

このような Bérénice , Titus に共通の基盤が相互の理解を可能にしたのであり、Titus の愛のみを求めていた Bérénice は、それが逆説的な形をとるにせよ不変であることを確かめた以上、もはやそれに外的形態を与える必要は無くなったわけである。Bérénice は Titus の別離の決意を理解し、それに自発的に同意を与えることによって、愛を永遠の貞節へと質的転換し、Titus の説く「名誉」を護ったと言えよう。

≪Mon cœur vous est connu, Seigneur, et je puis dire
≪Qu'on ne l'a jamais vu soupirer pour l'Empire.
≪La grandeur des Romains, la pourpre des Césars
≪N'a point, vous le savez, attiré mes regards.

(V. 7)

このように再度己の胸の内を説明した²¹⁾後、Bérénice は Titus の心を疑った自身の誤りを悟って言う。²²⁾

≪J'ai cru que votre amour allait finir son cours.
≪Je connais mon erreur, et vous m'aimez toujours.

(V. 7)

そして彼女は Titus に最後の別れの言葉を告げるのである。²³⁾

≪Pour la dernière fois, adieu, Seigneur.

(V. 7)

以上の如く、Bérénice では Titus ↔ Bérénice の“対立”は、先に見た二悲劇における“対立”の枠組を、ほぼそのまま踏襲して展開される。しかしながらその極点に於て Bérénice が Titus を理解することによって“対立”は解消する。“情念に憑かれた人間”として行動してきた Bérénice が Titus の死の決意を知って、彼の説く逆説的な論理を理解し、彼を支配している道德律を受け容れるに至る

のである。ローマ皇帝としての名誉のために Titus 同様に Bérénice もまた自己を犠牲として捧げることによって、以後の死にもまさる苦痛にみちた生を共有することになる。従ってこの悲劇は、Bérénice が“情念に憑かれた人間”から“道徳律に支配される人間”へと自己を変革し、Titus に倣って自己否定を行うまでの過程を舞台上で展開したものと見なすことができるだろう。

註

- 1) Racine : Œuvres complètes, “Bibliothèque de la Pléiade”, t. I, p. 479.
- 2) Ibid., pp. 481 ~ 482.
- 3) Ibid., p. 485.
- 4) Ibid., p. 484.
- 5) Ibid., p. 484.
- 6) Ibid., p. 493.
- 7) Ibid., p. 493.
- 8) Ibid., p. 510.
- 9) Ibid., p. 493.
- 10) Ibid., p. 506.
- 11) Ibid., pp. 515 ~ 516.
- 12) Ibid., p. 516.
- 13) Ibid., p. 500.
- 14) Ibid., p. 502.
- 15) Ibid., pp. 507 ~ 508.
- 16) Ibid., p. 504.
- 17) Ibid., p. 505.
- 18) Ibid., p. 475.
- 19) Ibid., p. 487.
- 20) Ibid., p. 486.
- 21) Ibid., p. 519.
- 22) Ibid., p. 520.
- 23) Ibid., p. 520.

先に見たとおり三つの悲劇では“対立”の場は複数の人物によって構成されていた。ところがここで取り上げる *Phèdre* に於て様相は一変する。即ち *Phèdre* と“対立”する人物が存在しないのである。確かに見方によっては *Hippolyte* の無垢と *Phèdre* の不倫の情火とが対立するとも言えよう。しかしながら *Hippolyte* は *Phèdre* に対し決して自己の思想を開示することはない。 *Phèdre* と対決すべき会見の場にあつて *Hippolyte* は常にそこから逃げ出すこと、彼女の話をはぐらかすことのみを意図している。 *Phèdre* を支配する *Vénus* に彼の崇拜する *Diane* を対置することはない。

“対立”を構成する“情念に憑かれた人間”も、“道德律に支配される人間”も共に *Phèdre* 自身の中に見出せるのであり、 *Phèdre* の内面こそが“対立”の場となると言えよう。事実 *Phèdre* という悲劇全体が *Phèdre* の独白を中心として成立しているものであり、他の登場人物達の台詞は *Phèdre* の独白を導き出し、促し、補足説明するためにのみ発されるという性格が濃厚である。

そこで *Phèdre* は如何にして *Phèdre* 自身と“対立”するのか、 *Phèdre* の独白を中心に具体的に検討してゆくこととする。

Phèdre は惑乱の極みにあつて我々の前に姿を現わす。そして早くも次の言葉で「この世の生を断念」しようとしていることを示す。¹⁾

«Soleil, je te viens voir pour la dernière fois. (I. 3)

次いで *Hippolyte* を思い描きつつ我知らず洩れ出た言葉を乳母の *Cœnone* に聞き咎められて次の如く言う。²⁾

« Insensée, où suis-je? et qu'ai-je dit?
« Où laissé-je égarer mes vœux et mon esprit?
« Je l'ai perdu: les Dieux m'en ont ravi l'usage.
« *Cœnone*, la rougeur me couvre le visage:
« Je te laisse trop voir mes honteuses douleurs,
« Et mes yeux, malgré moi, se remplissent de pleurs. (I. 3)

前三行によって示されるのは *Phèdre* の自己喪失の姿である。このような言葉から我々が思い出すのは *Hermione* や *Oreste*, 更には *Narcisse* によって示された

Néron の姿である。ここにはそれらの激しい情念に支配された人間達と共通の特徴を認めることができる。しかもその原因は Œnone の «Aimez-vous?»³⁾ という問に Phèdre 自身が «De l'amour j'ai toutes les fureurs.»⁴⁾ と答えるように「狂おしい限りの恋」なのである。しかしながら、Phèdre が取り乱しているのは単に狂おしい愛の情念のみのためではない。後三行からも理解されるように「恥ずかしい悩み」、罪悪感が Phèdre から平静を失わせているのである。そのことは Phèdre の «J'en ai trop prolongé la coupable durée.» という言葉に Œnone が «Quoi? de quelques remords êtes-vous déchirée?/ Quel crime a pu produire un trouble si pressant?»⁵⁾ という問を返していることからより明瞭に読みとることができるだろう。正に Phèdre の内面は狂おしい情熱と「罪深い生命を長らえ過ぎた」という自責の念に「引き裂かれている」のである。“情念に支配される人間”としての Phèdre と、罪悪感、即ち、道徳律に支配される人間としての Phèdre がここに同時に示されていると言えよう。

ところで、ここで付言すべきことは、二人の対話に於て Œnone の発する問が、実は問ではなく、Phèdre が言い淀み、曖昧な表現で示した内容を、疑問形ではあるがより簡明直截に言い表わすという役割を果たしていることである。Phèdre の不倫の恋の対象が Hippolyte であることを白日の下に晒すことになるやりとりやはりこの形式に従って為されるのである⁶⁾。

Phèdre : J'aime ...

Œnone: Qui?

Phèdre : Tu connais ce fils de l'Amazone,
Ce prince si longtemps par moi-même opprimé?

Œnone: Hippolyte! Grands Dieux!

Phèdre : C'est toi qui l'as nommé. (I.3)

従って Œnone の台詞は Phèdre との対話というより、むしろ Phèdre の独白の補完として理解すべきであろう。

さてそのような Œnone を相手に Phèdre は Hippolyte に初めて会った時の思いを次の如く語る⁷⁾。

« Je le vis, je rougis, je pâlis à sa vue ;

≪ Un trouble s'éleva dans mon âme éperdue;
≪ Mes yeux ne voyaient plus, je ne pouvais parler;
≪ Je sentis tout mon corps et transir et brûler.

(I. 3)

Phèdre の内部に萌した情熱はその発端から彼女の顔色を失わせ、身を凍らせる程の罪悪感と恐怖を伴っていたのである。情念と罪悪感の表裏一体の関係は常に変ることなく Phèdre に付きまとうであろう。とはいえ、Phèdre のあらゆる抵抗にも拘らず、情念は情念本来の法則に従って彼女に作用する。夫 Thésée の死という誤報に接した Phèdre に Œnone の語る言葉は、Phèdre の内部に巣くう情念が彼女の内面に引き起こすはずの幻想を言い当てている⁸⁾。

≪ Votre fortune change et prend une autre face: . . .
≪ Vivez, vous n'avez plus de reproche à vous faire:
≪ Votre flamme devient une flamme ordinaire.
≪ Thésée en expirant vient de rompre les nœuds
≪ Qui faisaient tout le crime et l'horreur de vos feux
≪ Hippolyte pour vous devient moins redoutable,
≪ Et vous pouvez le voir sans vous rendre coupable.

(I. 5)

既に自殺の決意を示していた Phèdre は、Œnone によって代弁された“情念の誘い”を受け容れて次の如く言う⁹⁾。

≪ Hé bien! à tes conseils je me laisse entraîner.
≪ Vivons, si vers la vie on peut me ramener,

(I. 5)

Thésée の死という誤報に一旦身を任すと Phèdre の内部では情念が本来の運動を開始し、錯誤が自己増殖してゆく。Hippolyte との会見の場に於て、Thésée の生存の可能性を説く彼に対し、Phèdre は Thésée の死を断言する。そして Thésée の思い出に、彼女のいまだ Hippolyte 像を重ね合わせ、その Hippolyte 像に対して覚えず愛を告白してしまう。

それでは Phèdre の内部に描かれた Hippolyte 像とは如何なるものなのであろうか。我々はまずそこに現れた錯誤の相を見、次いでそのような錯誤を生み出した Phèdre の内面に潜む原因について検討することとする。

若き日の Thésée の姿に仮託して、現実の Hippolyte を前に Phèdre が描き出す Hippolyte は、Thésée の弱点を裏返した理想的な姿をとっている。即ち、数多の女に愛を捧げる Thésée とは逆に、昂然たる、荒々しい感じさえ与える、「高

貴な恥じらいに頬を染めた」¹⁰⁾ 若者なのである。しかも Hippolyte がこの Phèdre の愛の告白を斥けたことから、彼女は錯誤を増幅することになる。

そのような錯誤の第一の原因は、勿論彼女を支配している激しい情念である。

Phèdre は Hippolyte の拒絶の理由を思いめぐらして、彼が森の中で無骨に育ち生れて初めて耳にした愛の言葉に「恐らく驚きのあまり口もきけなかったのだろう」¹¹⁾ とする。更に、「一国を支配するという魅力が彼を動かしたようだ」と考えた Phèdre は、彼の歓心を買うべく Œnone に「彼の目の前に王冠をきらめかせるよう」命ずる。¹²⁾ 権力の座を譲れば Hippolyte は Phèdre の子に父親代りにもなれば、国を治めるすべも教えてくれるであろうというのが彼女の想像である。つまりここで Phèdre は先にみた Andromaque の錯誤と Pyrrhus の錯誤を縋い交ぜた幻想を語っていることになる。先にも触れた通り、自己を取り巻く現実の認識を誤る盲目性は、Racine 悲劇を構成する“情念に憑かれた人間”の主要な特徴であったが、ここに見る Phèdre の錯誤は正にそれに照応していると言えよう。しかしながら、このように理性を捨てて錯誤に身を任す自己の盲目性を Phèdre は十分認識している。例えば先に触れた Œnone への命令に先立って彼女は次の如く言っているのである。¹³⁾

« Sers ma fureur, Œnone, et non point ma raison. (III. 1)

また、誤った根拠の上に空しい希望をいだくことは“情念に憑かれた人間”の特徴であったが、Phèdre の内部にもやはりそのような虚しい希望が忍び込む。¹⁴⁾

« Et l'espoir, malgré moi, s'est glissé dans mon cœur (III. 1)

この場合にも Phèdre は根拠の無い希望の侵入に自覚的であり、« malgré moi » という但し書きの挿入を忘れない。

しかも Phèdre はそのような不倫の情熱に押し流される自己の罪深さを十分認識しており、そのことを当の Hippolyte を前にして明らかにせずにはいられないのである。¹⁵⁾

« Hé bien! connais donc Phèdre et toute sa fureur.
« J'aime. Ne pense pas qu'au moment que je t'aime,
« Innocente à mes yeux je m'approuve moi-même,
« Ni que du fol amour qui trouble ma raison
« Ma lâche complaisance ait nourri le poison. ...

« Je m'abhorre encor plus que tu ne me détestes.

(II. 5)

それではおぞましい罪悪という高い代価を払って敢えて情火に身を委ねた Phèdre を待ち受けていた結果は如何なるものであったろうか。彼女の依拠していた前提 は次々と錯誤であることが判明し崩れ去る。まず Thésée の死という前提が崩壊する。即ち Œnone によって Thésée の帰還が告げられるのである。「罪を犯しながら平然とはしてはいられない」¹⁶⁾ 種類の人間である Phèdre は、彼女の情火を目撃した壁や天井までもが彼女を告発しようと身構えているかの如き恐怖にとらわれ、当初の死の決意に立ち返る。¹⁷⁾

« Mourons. De tant d'horreurs qu'un trépas me délivre.

(III. 3)

次いで、情知らずの Hippolyte という錯誤の第二の前提が崩壊する。即ち、Hippolyte が Aricie と愛し合っていることを Phèdre は知る。“情念に憑かれた人間”としての Phèdre は当然のことながら嫉妬に駆り立てられ狂乱の叫びを発する。しかしながら、ここでも彼女はあたかも冷静に他人を眺めるかの如くに、自身の狂乱の姿を見なければならない。例えば彼女は Aricie の殺害を叫んだあとで次の如く言うのである。¹⁸⁾

« Que fais-je? Où ma raison se va-t-elle égarer?

« Moi jalouse! Et Thésée est celui que j'implore!

« Mon époux est vivant, et moi je brûle encore!

« Pour qui? Quel est le cœur où prétendent mes vœux?

« Chaque mot sur mon front fait dresser mes cheveux.

« Mes crimes désormais ont comblé la mesure.

« Je respire à la fois l'inceste et l'imposture.

(IV. 6)

Phèdre が自己の内部に生起する情念を罪悪としてかくも明瞭に見なければならないことこそが、彼女を、先に見た悲劇に於ける“情念に憑かれた人間”達からはっきりと分け隔てているのである。しかも情念の力に翻弄される自分自身を認識しながら、自己の力では如何ともしがたいこと、これが Phèdre を悲劇的人間たらしめているのである。

「仮借なき Vénus」¹⁹⁾ に打ちひしがれた自身の姿を、祖先たる「太陽神」の視線に晒さねばならない Phèdre は先の引用の部分に続いて次の如く述べている。²⁰⁾

« Misérable! et je vis? et je soutiens la vue
« De ce seacré Soleil dont je suis descendue?

(IV. 6)

即ち、Phèdre は自身の内部で生起する事象のすべてを「太陽神」の眼で見なければならぬのみならず、その道德律に従ってそれらを裁くべく運命づけられているのである。

さてここで Phèdre のいだいていた Hippolyte 像に於ける錯誤の問題に立ち返ってみると、それが単に Vénus に呪われた情念の作用にのみよるのではないことが理解できよう。即ち、そこには Phèdre の内面を支配する道德律（＝太陽神の視線）が作用していたのである。Phèdre の思い描く理想化された Hippolyte 像は、彼女が夫の Thésée に求めても得られぬ諸々の価値を体現している。何故ならば Phèdre が自らを罪に落して敢えて Hippolyte を愛した以上、彼女の払う不倫という犠牲の大きさに見合うだけの美德を彼が具えていなければならないからである。従って彼女の描く Hippolyte は、あらゆる美女に愛を誓う Thésée とは対照的に、如何なる女の愛も斥けるという青年らしい潔癖さをもった、荒々しくも無垢な若者とされているのである。Phèdre は Hippolyte の中に、あり得たかもしれない自分自身の姿と、それと愛し合うに相応しい理想の青年の姿を幻視していたのである。

しかしながら Hippolyte は Phèdre の内面のそのような屈折には全く理解を示さず、彼女の愛の告白に対し、彼は二重の意味での無視と拒否でもって応える。²¹⁾

« Dieux! qu'est-ce que j'entends? Madame, oubliez-vous
« Que Thésée est mon père et qu'il est votre époux?

(II, 5)

もとより Phèdre は己の行為が不貞の謗を免れないことは百も承知であり、それを恥じ、深い罪悪感に苛まれていたのである。にもかかわらず敢えてそのような行為を選んだのは彼女の求めるものが純粹なるものであり、それが Hippolyte の中に存在すると彼女が考えたということを Hippolyte その人に理解させたかったがために他ならない。しかしながらそれに対する Hippolyte の反応は上の如くであり、Phèdre の伝えようとした内容はもとより、彼女につきまとして離れぬ罪悪感さえも無視し、理解しなかったのである。

更に、Hippolyte は罪の無い話を愛の告白と聞き違えたとして Phèdre に謝罪し、その場から逃げ出そうとしたのである。²²⁾

« Madame, pardonnez. J'avoue, en rougissant,
« Que j'accusais à tort un discours innocent.
« Ma honte ne peut plus soutenir votre vue;
« Et je vais ...

(II. 5)

これに対する Phèdre の返答を引いておくと次の通りである。²³⁾

« Ah! cruel, tu m'as trop entendue.

(II. 5)

つまり Phèdre が Hippolyte から得た反応は、彼女の告白を忌わしい不貞の行為と見なす最も表面的で浅薄な誤解であった。Hippolyte は Phèdre の彼への愛の中に秘められた“純粹への渴望”²⁴⁾とでも呼ぶべきものを理解しなかったのはもとより、告白するに至った彼女の罪悪感と恥辱感をも全く無視したのである。しかも情知らずであるはずの彼は Aricie と愛し合っていたのであり、Phèdre の錯誤はその意味でも二重であった。Hippolyte は Phèdre が思い描いたように彼女の内面を理解する能力は無く、かつ彼女の愛の理由であった女をすべて斥けるという潔癖さも持たなかったのである。“情念に憑かれた人間”としての Phèdre は恋仇の Aricie に完全に敗北したのであり、“道徳律に支配された人間”としての彼女は致命的な錯誤と罪悪を犯していたのである。そして最終的に彼女に残されたのは不倫の汚名のみであった。

Vénus の呪いを受けた女として不倫の情熱に翻弄された Phèdre は、その己の姿を太陽神の眼でつぶさに見、且つその道徳律に照らして裁かねばならなかった。Hippolyte への愛と Thésée への貞節という相容れない二つの要求が神々の絶対的な意志として Phèdre の内部で対立しあっていたのであり、そこには如何なる妥協の余地も存在せず、対立は極限にまで押し進められる他は無い。Phèdre に残された唯一の道はそのような絶対的な二つの力の対立の場としての自己の存在そのものを否定することであった。かくして彼女は内面の分裂の極限に於て敗れ、死を選んだのである。

Thésée への貞節を要求する同じ道徳律が、Phèdre をして Hippolyte の中に彼女の理想とする青年の姿を見出させたのであり、その意味で彼女の Hippolyte への愛は逆説をはらんでいた。Phèdre のこのような内面の屈折と逆説的な論理を、もし Hippolyte が理解していたならば、Phèdre の死は彼女の罪悪感の深さの証左、彼女の自己処罰として受け取られたであろう。しかしながら、彼女を包んでいたのは周囲のすべての人物達の彼女への徹底した無理解であった。Phèdre が理解された

いと望んだ唯一人の人間 Hippolyte は彼女を忌わしい情念に憑かれ、嫉妬に狂った女と信じたまま、彼女と Œnone の讒言を受け容れた Thésée の呪いによって非業の死を遂げるのである。

内面での“対立”の極限に於て、その“対立”の場としての自己の存在を否定した Phèdre の死は、罪悪感からの自己処罰としての意味のみならず、恋仇への敗北による絶望的行為としての意味をも負わされざるを得なかった。Phèdre はその死さえも情念と道徳律に引き裂かれていたと言えようが、そのことが却って彼女の死の自己処罰としての側面、彼女が自己を支配する仮借なき道徳律に殉じたことを強調しているとも言えよう。

以上のとおり、Phèdre では Phèdre の内面そのものが舞台となり、そこで“情念に憑かれた”Phèdre と、“道徳律に支配された”Phèdre とが“対立”するのである。従って Phèdre 以外の登場人物達は全くの副次的意味をもつにすぎない。しかもその“対立”は神々の意志によるものであり、それは極限にまで押し進められる他は無い。そのような内面の分裂の果に、Phèdre は自殺することによって文字通りの自己否定を完遂するのである。

註

- 1) Racine : Œuvres complètes, “Bibliothèque de la Pléiade”, t. I, p. 754.
- 2) Ibid., pp. 754 ~ 755.
- 3) Ibid., p. 757.
- 4) Ibid., p. 758.
- 5) Ibid., p. 756.
- 6) Ibid., p. 758.
- 7) Ibid., p. 758.
- 8) Ibid., p. 760 ~ 761.
- 9) Ibid., p. 761.
- 10) Ibid., p. 770.
- 11) Ibid., p. 775.
- 12) Ibid., p. 775.
- 13) Ibid., p. 775.

- 14) Ibid., p. 774.
- 15) Ibid., p. 771.
- 16) Ibid., p. 777.
- 17) Ibid., p. 777.
- 18) Ibid., p. 791.
- 19) Ibid., p. 776.
- 20) Ibid., p. 791.
- 21) Ibid., p. 771.
- 22) Ibid., p. 771.
- 23) Ibid., p. 771.
- 24) Phèdre の内部に存在する純粹なるものへのこのような衝迫を
L. Goldmann は次のように呼んでいる。《une recherche de pureté》
(Le dieu caché, p. 434.) 《le désir de pureté》 (Ibid., p. 437.)